自分の身は自分で守る

甲陵中学校　一年　池田　歩夢

四月から、雄大にそびえたつ八ケ岳のふもとにある北杜市の中学に通いはじめた。毎日、電車から見る風景は、まさに、絵に描いたような絶景である。西に甲斐駒ケ岳・東にみずがき山といった日本でも有数な山が、季節とともに表情を変え、毎朝出迎えてくれる。また、その山からは、豊富なわき水も出てるとから、北杜市は、山紫水明の地と呼ばれる。

この中学校に入学して総合的な学習の時間に「八ケ岳南麓学」という特色のある授業が始まった。この「八ケ岳南麓学」は、地元八ケ岳周辺の歴史や文化に触れ、テーマを決め、研究をするものだ。

ぼくは、地元の北杜市に祖父母が住んでいることもあり、授業が始まってすぐに、北杜市のことについて祖父母から話を聞いてみた。自然のこと、農業のことなどを聞く中で、一番驚いたのは、災害のことだった。山紫水明

の穏やかな北杜市で、過去に死者の出る大きな災害があったと知り、ぼくは、言葉を失った。

この北杜市武川村で起きた災害は、伊勢湾台風と呼ばれ、日本各地に大きな被害を与えた台風によるものであった。当時、台風により記録的な大雨が降り続き、川がはんらんしにし、土石流が発生し、多くの家や人を一瞬のうちに飲み込んだ。その勢いのある土石流は、北杜市にとどまらず、下流の韮崎市や、ぼくの住んでいる甲斐市まで流れ着いたという。正直、想像もつかない。

この話を祖父母から聞いた後、実際に当時、土砂災害のあった北杜市武川町の現場を見に行く機会があった。そこは、ぼくも何度か通ったことのある場所だった。現場を目のあたりにしこんな、見近な場所で災害が起きたことが信じられずにいた。

その時、ぼくは、昨年、八月に茨城県で起きた、鬼怒川の堤防が決壊して多くの人が犠

牲になった光景が目に浮かんだ。この様子はテレビでも連日、報道されていたので、自然の怖さをまじまじと知る機会となった。きっと、川の流れの速さに違いはあるものの、同じような悲劇がこの北杜市であったのだと想像した。五十七年前、この地域に住んでいた人々は、あのような恐ろしい惨劇が起こるとは、思いもしなかったにちがいない。

北杜市武川町で大災害が発生してから五十年経過した年地元の有志が、水害で、犠牲になった方へのいれいと水害を風化させることなく後世に伝えることを目的に巨大モニュメントが作成されたと知った。そのことを知り、その方々の意思を大切に、ぼくたち世代は、この災害が起こったことをまずは知り、そこから学ぶべきだと感じた。

災害は、いつ起こるか予測ができないものだ。だからこそ、過去から学び、それを活かし、災害に備えることが日々必要だと思う。

現在、山梨県に住んでいるぼくたち世代の若

い人達は、この昭和三十四年の大災害のことを知らない人が多いと思う。県内に住んでいるにも関わらず、郷土の歴史について知る機会は、あまりにも少ない。今こそ、僕たちのような若い世代は、積極的に住んでいる地域の過去の歴史について知るべきである。

今回、中学校に入学し、「八ヶ岳南麓学」を学ぶ機会をから、災害のことを知ることができにことは、ぼくにとって、改めて自然災害と向き合うきっかけとなった。

小学校に入学した年、東日本大震災が起こり、自然の恐ろしさを体感した。その恐ろしい経験から、家族で、災害についてルールを話し合うことにつながった。まだ、幼かったけれど、自らが恐ろしい経験をしたことで、災害の時、自分のとるべき行動を知ることができた。

そして、中学校に入学した今、小学校の頃とは全く環境の違う中にいる自分が一人いる。通っている中学校は、住みなれた地区からか

20×20

なり遠く、電車での通学となったため、今まで小学校時代に通用していたばずのルールは全く通用しなくなっている。つまり、新しいルールを作る必要がある。といっても、住み慣れない地域での危険な場所は、よく分からない。そのため、まずは、ハザードマップで危険な場所の確認しておくことが大切だ。しかし、確認して置いた場所ではない別の場所で災害が起きたらどうする。ぼくだったら自分の知っている知識を利用し適切な対応や行動を取る。ぼくの心には、「自分の身は自分で守る」ということばが響いている。このことばをこれからの未来を生きる人たちも、意識してほしい。これが、ぼくの願いである。

20×20